

「なぜ」と「の」の共起——疑問語疑問文における——

A Note on *Naze* and *No* in Interrogative Sentences

山西 正子
Masako YAMANISHI

Abstract

This paper deals with a co-occurrence relationship between *naze* and *no* in interrogative sentences. The author would like to describe the facts in modern Japanese. In *riyuu-gimonbun*, an interrogative sentence asking why, *no*, or *nodesuka* is usually expressed as *naze yomuno* or *naze yomunodesuka*. In other interrogative sentences asking who, when, where, what, and how, a polite form *masuka* is also used as *dare ga yomimasuka* and *itsu yomimasuka*. In modern Japanese, we have two polite forms *desu* and *masu*. In interrogative sentences, according to the type of interrogative words, we usually select either *desu* or *masu*.

キーワード：「なぜ」、終助詞「の」、疑問語疑問文、丁寧表現

Key Words : *naze*, postpositional particle *no*, interrogative sentences, expression of politeness

【構成】

- 0 目的と問題のありか
- 1 先行研究
- 2 現代語の理由疑問文と「の」
- 3 現代語の丁寧表現
- 4 疑問の終助詞「の」の広がり
- 5 関連事項
- 6 まとめ
- 7 付記

0 目的と問題のありか

0.1 目的

本稿は、「疑問語疑問文」と「の」の共起状況について考察する。そもそも口頭語の疑問表現において、終助詞「の」はきわめて有効であり、疑問語疑問文に「の」が多用されるのは当然であるにせよ、なぜ、理由を問う「なぜ/どうして/なんで」であればことさらに「の」が要求されるのかを検討する。なお、「の」と丁寧表現——「のですか」になるか、「の」を介さず「ますか」になるか——との関連についても考察し、以下の3点を指摘する。

- ①「疑問語」は多いが、理由疑問文の場合は「の」との共起が強く求められ、他の疑問語であれば、その度合いが多少ながら小さいものがあり、「疑問語」として一括しないほうがよい。
- ②丁寧表現で述部に動詞が含まれる場合、現代共通語では、「読む」を例にとれば、ニュアンスの差はあるにせよ、「読みます」あるいは「読むのです」しか考えられない。したがって、この疑問表現は「読みますか」あるいは「読むのですか」の2パターンとなる。しかるに、「なぜ」と共起するのは原則として「読むのですか」である。現代語には、「ます」よりも「です」を選ぶ傾向があるのではないか、そのことが、「読みますか」より「読むのですか」を選ぶ方向に誘導してはいないか、試案として提示する。
- ③「の」の出現は、「です」を選択したために必然的に生ずるとみるほか、疑問の終助詞「の」がその地位を確実にしてきたためという側面もあろう。このことは、各種の辞書の記述からも伺える。

0.2 問題のありか

2008年春以来、日刊紙にサプリメントの広告が何回も掲載されているのに気づいているが、その文言は（以下、下線は稿者）

- (1) なぜ、Aを飲んでいますか？ (2008. 4. 15 朝日新聞夕刊7面)
 である（Aは商品名）。

稿者はこれに違和感を持つ。むろん、広告文としての効果を意図した、含みのある表現であることは十分に理解できるが、単純に文法的に受け取ると、ある種の「落ち着きの悪さ」が感じられる。幼少時からなじんだ歌詞も、「なぜ」があれば

- (2) からすなぜ鳴くの からすは山に〈略〉 (七つの子)
 (3) 金欄緞子の帯しめながら 花嫁御寮はなぜ泣くのだろう (花嫁人形)

であり、「の」と共起する。

(2)の「の」は一般的には終助詞、(3)の「の」は準体助詞とも形式名詞とも連語「のだ」の一部ともされ、解釈は一定しないが、現象としては、「なぜ」があれば「の」が共起することになる。

そして同じ広告として

- (4) よく聞かれます。味の素(株)が、なぜ化粧品をつくったのですか？

(2008. 9.7 朝日新聞 be on Sunday 1面)

があり、このかたちには違和感がない。この違和感に理由があるかを解明したい。

ただし、稿者にとっては「違和感」であっても、すでに、日本語教育のテキストは、理由を問う疑問文でありながら「の」を含まない例文を基礎段階で提示し、教育していた事実がある。このテキストによる日本語学習者あるいは日本語教授者には、稿者の「違和感」が「違和感」として意識されないことも、十分に考えられる。

すなわち、『しんにほんごのきそ』は有力なテキストであるが、1990年の初版から、「の」を含まない「理由疑問文」が教科書本文に掲載され、1996年の教師用指導書でも、その指導法が説明されている。質問と答えの例をいくつか示す (a～fは稿者)。

a どうして ダンスを しませんか。

b ダンスが 下手ですから。

c どうして テレビを 見ませんか。

d どうして 日本語を 勉強しますか。

(『新日本語の基礎Ⅰ』 スリーエーネットワーク 1990年初版)

e どうして会社を休みますか。

f 頭がいたいですから。

(『新日本語の基礎Ⅱ教師用指導書』 スリーエーネットワーク 1996年4版)

これらの「にほんご」は、日本語教育の上からは、教育しやすい効果的な「にほんご」と認識されていたのであろう。また「サバイバルジャパニーズ」としてみれば、相応の意義があるともいえる。また、英文翻訳の可能性も考えられはする。

稿者は、これらの質問の文は、答えの b・f が理由を示していることからして、「理由疑問文」として解釈せざるを得ない。とすれば、a・c・d・eについては「どうしてダンスをしないのですか」をはじめ、「見ないのですか/勉強するのですか/休むのですか」のように、「ののですか」とあるほうが、はるかに自然である。「どうして ダンスを しませんか」「どうして テレビを 見ませんか」は文そのものが不自然に感じられる。

一方、d・eは「どうして」を使用した、手段を尋ねる疑問文として理解するほうが、はるかに自然である。したがってdには「独学です/日本語教室です」など、eには「有給休暇をとります/仮病を使います」などの答えが想起される。

1 先行研究

上述0. 2の疑問については、益岡・田窪1992が原則を示している。要約すると以下のごとくである(①②、下線および(引用例)は稿者)。

なお、益岡・田窪1992は、「の」を「補足節を作る形式名詞」とし、「[だ]と結合して助動詞となる」とする。

① 疑問語疑問文は未定の要素(焦点)を含むので、「の(か)」を取ることが多い。

(引用例5) 誰が来るんですか。

② ただし、単なる事実の報告を求めたり、意向確認の場合は、「の(か)」を用いなくてもよい。

(引用例6) さっきの試合、どっちが勝ちましたか。

(引用例7) 何を食べますか。

疑問語「なぜ」は「単なる事実の報告」の要求や「意向確認」のために使用されるものではない。発話者は「発話者自身には不明な理由の説明」を要求する、「未定の要素」の多い疑問文に「なぜ」を使用するのである。

上述の用例(1)に対する稿者の違和感は、すくなくとも現代日本語の状況からいえば、「理由なし」ではないと考える。

益岡・田窪は1992は、「[の(か)]を取ることが多い」とするが、稿者は(2)(3)(4)の例から、「なぜ」があれば「基本的には[の]が共起する」と予測する。

問題は、例示された3例とも、丁寧表現である点にある。これらについては、それぞれ「ます/のです」を入れ替えたかたちが可能である。

むしろ、ニュアンスの差はある。イントネーションにもよるだろうが、一般的には、「のですか」の方が、「詳しい/迅速な回答」を求めるものとして受け取れる。

(引用例5') 誰が来ますか。

(引用例6') さっきの試合、どっちが勝ったのですか。

(引用例7') 何を食べるのですか。

益岡・田窪1992は「だれ/どっち/なに」を例示しても「なぜ」を検討していない。そこで、ここでは「なぜ」を中心に検討していく。

すなわち、「だれ/どっち/なに」は「ますか/のですか」の両様が可能だが、「なぜ」の場合、稿者には「ますか」との共起に違和感があり、「疑問語疑問文」として一括してもよいのか、確認したいからである。

2 現代語の理由疑問文と「の」

2.1 理由疑問文と「の」の共起

本稿は、「なぜ/どうして/なんで」による、理由を尋ねる文を「理由疑問文」とする。以下に、「朝日新聞」に見られる、述部に動詞・形容詞を含む例を示す。すべて稿者による「手作業」である。

(8) なんでいつも自分だけ、空気を読んで我慢しなくちゃいけないんだろう、と悲しくってやめた。(2008.9.2 夕刊9面 小説『親子三代犬一匹』藤野千夜)

(9) 「なぜ自民党の皆さんが自分たちのリーダーを全力で支えないのか」(2008.9.2 夕刊12面 「福田首相辞任」橋下大阪府知事)

- (10) なぜ、このようなことになるのか。
(2008. 9. 3 朝刊22面 「福田首相辞任」 杉田敦法政大教授)
- (11) なぜ蝶は舞えたのか (2008. 9. 3 夕刊5面 「美の履歴書」見出し)
- (12) 「なぜ幼児向けとされるのか。ほくは、そんな常識と闘ってきた」
(2008. 9. 4 夕刊1面 「絵本きらめく」五味太郎)
- (13) 末期がんだった患者さんは「どうして治らないんだ」と、医者や看護婦さんに当たるこ
とが多々あった。(2008. 9. 4 夕刊7面 「ココロの元気」大谷由里子)
- (14) 最新鋭のイージス艦内で起きたミスの数々は、なぜ起きたのか。
(2008. 9. 4 夕刊12面 「あたご海難審判」)
- (15) 「何で早う言わなかつたんや。水くさいやねえか」と電話をかけた。
(2008. 9. 4 夕刊13面 大分教員汚職初公判)
- (16) フナのどんな遺伝子に変化が起きると金魚になるのか。なぜ多彩な変化が起きるのか。
(2008. 9. 7 朝日新聞be on Sunday1面)

このように、「なぜ/どうして/なんで」による理由疑問文について、述部に動詞が含まれる場合、「の」(あるいは変形の「ん」と共起する例はきわめて容易に確認できる。見出し、地の文、会話文、方言の会話文など、万遍なく出現する。理由疑問文には「基本的に「の」が共起する」といえる。

2. 2 「の」が出現しない理由疑問文

「なぜ」があるのに「の」を欠く、いわば「例外」もある。①②③とする。

- ① 述語を補う、益岡・田窪のいう「補足節」で、疑問内容や引用部分にあたる節の場合。
- (17) (核に関するNSG決議について) 日本政府はなぜ容認したかを国民に説明する義務がある。
(2008. 9. 15 朝刊3面 「核兵器増産の恐れ増す」
鈴木達治郎東大大学院客員教授・聞き手安東建)
- (18) 「なぜ出演が多いかって、そんなのわかりませんよ。〈略〉」
(2008. 9. 26 朝刊6面 「60歳目前柄本明自在に活躍」)
- ② 述部が推量であって「だろう」によらず、「よう」を選択した場合。この選択の時点で「の」は不可能になる。ここでは、形式的には疑問文であるが、真意は「そのようなことはない」という明確な否定である。答えが初めから用意され、単に「いいえ」を引き出すだけである。実質的には理由疑問文ではない。関連事項は5. 2で述べる。
- (19) 人間は言語によって考える。日本語で表現できないものを、どうして英語で表現できようか。
(2008. 9. 14 朝刊8面 (声・主張)
「英語よりまず日本語の習得」 高校教員 坂口尚子)
- ③ 会話文であって、前後の内容や、視覚的に「？」が示されるなどの状況から、上昇調イントネーションを伴う疑問文であることが明らかである場合。

(20) 「なぜ、オレが生まれ変わりだとわかった？」

(2008. 9. 11 朝刊28面 小説『徒然王子』島田雅彦)

2. 3 「の」の有無と疑問文の性質

2. 2のごとく、状況によっては、理由疑問文でも「の」と共起しないことはある。しかし、他の疑問語疑問文の場合に、これほどまでに、「の」と共起するとは考えられない。

基本的に、理由疑問文と他の疑問語疑問文の差は、答えが、「主述あるいは目的語と動詞を備えた文」であることが要求されるか、名詞文でよいか、にある。益岡・田窪1992の記述を合わせて図式化すれば、以下のごとくである。

問い：だれが来ますか。	答え：太郎です。
いつ帰国しますか。	明日です。
どこに行きますか。	東京です。
なにをたべますか。	リンゴです。
どちらを買いますか。	こちらです。
だれと出かけますか。	太郎（と）です。
だれに頼みますか。	父（に）です。
どこから来ますか。	東京（から）です。

しかし、理由疑問文はこのような単純な「答え」では、いささか不十分との印象を与えるといえる。

問い：なぜこの職業を希望するのですか。

については、「安定性です」は不可能ではないものの、「この職業には安定性があると考えているからです/私は職業選択の最優先順位を安定性においているからです」などのほうが（このほか進路指導課のアドバイスその他、さまざまな答えがあるが）適切であろう。日常の言語教育でも、主述の整った答えを指導されているはずである。

そして、これが仮に、

問い：この職業を希望する第一の理由は何ですか。

という「なに」による質問であれば、「将来性です」との答えに違和感はない。

ひとしく「疑問語疑問文」であっても、益岡・田窪1992の指摘をさらに厳密にすれば、理由説明を求める「理由疑問文」は「未定の要素」を明確化したいために、原則として「の」を伴うのではないか。

「だれ/いつ/どこ/なに/どちら」などによる疑問文は、答えが、「名詞+判断詞」という一定範囲内に止まり得る。それに対して理由疑問文とでは、より複雑な情報を要求し、答えは「主語+述語+から/ので」などの、単純ではない組み合わせが予測される。このようにいわば「分析的」な答えを予測して、「の」が使用されるのではないか。そして「の」を使用した結果、丁寧表現は必然的に「のですか」となり、「なぜ…ますか」は選択されにくくなるを考える。

2. 2で述べたように、理由疑問文で「の」が共起しない例は、相応の理由があるが、それ以外の疑問語疑問文であれば、「の」と共起しない例を、やや見出しやすい。新聞の実例を示す。

(21) (日本棋院への武者修行者たちは)はたしてどこまで強くなれるだろうか。

(2008. 9. 16 夕刊14面 「欧州の若者が武者修行」)

(22) プレーオフ進出をかけた激戦が続く中、どこまで勝ち星を伸ばせるだろうか。

(2008. 9. 17 朝刊23面 「松坂17勝ピンチで本領」)

3 現代語の丁寧表現

3. 1 「です」の優勢

稿者は経験上、現代日本語において、ことに若年層については、丁寧表現「です」の優勢は否定できないと考える。

大学生に「海外留学の経験はありますか」と質問すると、否定の答えには「ありません」「ないです」の両者があるものが、「ないです」が過半数を上回る。

「朝日新聞」2006年11月11日夕刊15面には、「ホテルマン敬語研修」の記事がある。ここでは「幹事の方はお越しになられていらっしゃいますか?」の二重敬語を訂正する例として、「お越しになっていますか」ではなく、「お越しですか」が示されている。「です」が確固たる地位を得ていると理解するほかない。

すでに一般の形容詞文について、「です」を添加して丁寧表現にするという「テクニック」が許容されている。

(作例23) 日本の夏は暑い。→日本の夏は暑いです。

(作例24) 今年の夏は暑かった。→今年の夏は暑かったです。

動詞であれば、「読みます」と「読むのです」が、またその否定文であれば「読みません」と「読まないのです」が——ニュアンスの差はあるにせよ——存在するはずであるが、若年層は「読みません」より、「読まないです」(「読まないのです」ではない)を選択する傾向にあると理解している。

「新聞は毎日読みますか」の答えは、若年層においては、しばしば「そんなには読まないです」であり、「そんなには読みません」は多くはない。

極端な言い方をすれば、形容詞文丁寧表現に起こった、「暑うございます→暑いです」にみられる「です」優勢化——「ございます」の減少と表裏一体である——が、動詞の「読みません→読まないです」にも、影響している可能性がある。

それに合わせて、疑問文でも「ますか」より「ですか」を選択する意識が強くなっていることは考えられる。とすれば、「読むのですか」が許容されない限り、「読むのですか」となって「の」が共起することになる。

稿者の感覚も、丁寧表現における「です」の優勢に影響されている可能性がある。

3. 2 疑問の終助詞「の」と「です」

口頭語では、疑問詞の有無にかかわらず、上昇調イントネーションに依存するほか、文末に疑問文であることを明示する「の」「か」を伴うことがある。常体であれば「読む?」や「読むの?」「読むか?」が疑問文になる。

これを丁寧表現にすると、「読みますか?」が可能だが、活用形を変える必要がある。となれば、形容詞文の例に倣い、常体の「読むの?」に「ですか」を添加するほうが、「迷わない」とする考え方もあるだろう。

一方には、疑問の終助詞「か」の問題もある。「読むか?」は、女性には単独で使用されにくいという事実があり、男性でも親しい間柄にしか使用しないであろう。しかるに活用形を変え、「ます」を添加して「読みますか?」とすれば、「読むか?」に比して格段に丁寧度が増し、必要以上に距離感が生じることもある。

これらの事情から、

- ①一般的には「読むの?」を使用する。
 - ②場面によってはそれに「ですか?」——しばしば「んですか」とする——を加える。
- という2用法により、丁寧度の切り替えを円滑化することが行われるのではないか。

かつての「形容詞ウ音便+ございます」とは異なり、丁寧になりすぎない「です」が形容詞文の丁寧表現として定着した今日、疑問の終助詞「の」を介して、動詞文にも、活用形を変える必要のある「ます」から、言い切り形のままで済む「のです」への傾斜が生じている可能性はあろう。

むしろ「読みます」と「読むのです」は等価ではない。後者には「説明的/堅い」との印象がある。疑問文にすれば、「詰問」の印象が付加されることもある。しかし、しばしば「読むんです」と発音されることにより、その印象をやわらげ、口頭語としても通用するのであろう。

終助詞「の」と、断定の丁寧表現「のです」の「の」は、出自はともに助詞「の」であっても、後者には「連語の一部」との説明もあるなど、理論上の位置づけは一定していない。

しかし、理論を離れて、実際の運用場面では、単純な疑問文「読むの?」に「ですか」を添加して丁寧表現とするという「テクニック」(命令であれば「読むの!」が「読むのです!」になる)が選択される。現代語は、3. 1で述べたように、「です」の優勢下にあると考えられるからである。

4 疑問の終助詞「の」の広がり

4. 1 疑問の終助詞「の」に関する辞書の記述

そもそも、助詞「の」の原義には「疑問」を表現することはなかったであろう。

『日本国語大辞典』第二版2000は「の」について、「終助詞」としても認め、

文全体を体言化し、詠嘆をこめて確認する。〈略〉。上昇のイントネーションを伴えば質問文になる。

としている。示される例は1776年の咄本『高笑ひ』であり、さほど古い用法ではない。また、「終助詞」としての記述そのものが、「格助詞」としての記述に比して、分量的にもきわめて少ない。

しかし、現代語を主とする辞書の記述には、変化が見られる。

『明鏡国語辞典』2000は、「終助詞」の4用法——以下は稿者の要約であるが、①断定②〈上昇調のイントネーションを伴って〉質問・確認③納得の確認④軽く命令する——のうちの1用法として明確な位置づけをする。

小学生用の『小学国語辞典』1981では「助詞」という術語を使用せず、すべての助詞「の」を5用法に一括しつつ、そのうちの第3番目に位置づけている。

(あることばの下につけて)

- ①ことばとことばを結びつけて、その関係をあらわす。例：うちの犬。公園の木。
- ②「もの」「こと」の意味をあらわす。例：大きいのがいい。行くのはいやだ。
- ③疑問の意味をあらわす。例：どうするの。
- ④物ごとをならべていうときに使う。例：リンゴだの、ミカンだの、たくさん食べた。
- ⑤やわらかい感じをだすために、ことばの終わりにつける。例：そうですの。

『明鏡国語辞典』、『小学国語辞典』とも、現代語において、疑問を表すための「の」が多用されていることを認識しているからであろう。

なお、『大言海』（『新編大言海』2001富山房による）は、「か」には終助詞用法を認め、

言語ノ末ニ居テ、言ヒ切りテ、問ヒ掛クル意ヲナス。〈略〉行クカ」落ツルカ」

としている。しかし「の」については、終助詞としての記述はない。大槻文彦の時代には、終助詞「の」は存在しており、何らかの判断で記述しなかったのであろう。

現代の辞書における、疑問の終助詞としての「の」の「記述拡大」は実勢の反映であろう。

4. 2 江戸時代の終助詞「の」

関連事項として、江戸時代の理由疑問文を見ると、4. 1の『日本国語大辞典』第二版の記述にある1776年から半世紀を経た『春色梅児誉美』（1833年）では、疑問の終助詞「の」は散見され、「なぜ」と「の」の共起もある。

(25) 「若旦那へなぜそんなに悲しいことをお言なさるのだエ〈略〉」

しかし同一人物が、同一場面で、「の」を使用したりしなかったりする例もある（以下の(26)(27)とも55ページ、芸者お米による）。断定の「のだ」はあっても、推量を合わせた「のだろう」が未発達——「だろう」の安定期は安永期（1772～1781）とする立場もあり、用例(29)にもある——であったのだろうか、「の」との共起状況は現代と同様ではなかつたと考えておく。

(26) 「おまはんマアなぜこんなにはかねへ身のうへにならしつたらふねへ」

(27) 「なぜあやまるのだエ」

(28) 「ほんにのふ堪忍しねへ。面目ないがなぜこんなに迷ったろう」

(29) 「なぜそんなに叱言をいふだろう」

また (26) (28) (29) のように推量を伴うばあいは、「の」を要求しない例が以後も続く。次の (30) は『和英語林集成』再版 (1872年)、3版 (1886年) の例である。

(30) なぜ そんなに 遠慮するだろう

したがって、冒頭の0. 2で示した稿者の、「なぜ」があるのに「の」が共起しないことに対する違和感は、歴史的には「根の浅い」ものと認めざるを得ない。

5 関連事項

5. 0 文学作品での確認

4. 2で、理由疑問文と「の」の共起は、少なくとも『春色梅児誉美』の時代にまでさかのぼれるが、現代のように、かなりの確率でそれが生ずるのではないことを想定した。

冒頭の0. 2に示した稿者の違和感——「なぜ」があるのに「の」がない、そして「ますか」が使用されるのは「変」という——を追跡するために、「新潮文庫の100冊CD-ROM版」により、「なぜ」「どうして」「なんで」と述部の動詞・形容詞が共起する例計261例を検索した。文学作品の会話文であれば丁寧表現が多いと予想したからである。しかし、単に「なぜ?」「どうしてですか」などの例も多く、理由疑問文の述語に「(ござい) ますか」「のですか」両様が可能な、動詞・形容詞を含む丁寧表現は、予想したほどには検索できていない。

5. 1 理由疑問語文で「の」を欠く例

理由疑問文であって「の」が共起しない例は、2. 2で示した例外ケースに該当するもの——(31)～(34) など——以外は (35) の1例のみであった。この「どうして」は秘密行動を察知された驚きから、「なぜ」に通ずるものと解釈したが、「いかなる手段で」も否定できず、疑問例としておく。軍人山本五十六の、「の」ではなく「か」のみによる疑問表現となっている例である。

(31) なぜ六月という曖昧な季節に社員旅行をやるか、というと〈略〉

(椎名 誠 『新橋烏森口青春篇』 1987)

(32) どうして先生は「みらい」と書かせたかと私が訊くと〈略〉

(33) 大切な金を、どうして私のような人間のために捨てたり出来るでしょう。

(以上2例とも 宮本 輝 『錦繡』 1982)

(34) 眼鏡の奥の目が侮りの色を帯びていたので、ややカッときて、「それがどうしてまずい」と聞き返すと〈略〉

(藤原正彦 『若き数学者のアメリカ』 1977)

(35) 「どうしてまた、僕が此処へ来てるということを知ったかネ？」と山本は言った。

(阿川弘之 『戦艦大和』 1965)

5. 2 理由疑問文の「ますか」

現時点で確認できた理由疑問語と「ますか」の共起例は2例である。ともに、2. 2②で示した、「反語」の用法——すなわち「いいえ」という明確な答えを引き出すためのテクニック——である。

(36) 「〈略〉そのような大罪を犯した者を嚴重に処罰するのが、なぜ軍の威信にかかわりますか。〈略〉」
(阿川弘之 『戦艦大和』 1965)

(37) (稿者注・離婚後、母の葬儀に帰省した荻野吟子が、そのまま生家に止まることを勧められて)「家はもう兄、保坪の代です。どうしていつまでもいられますか」
(渡辺淳一 『花埋み』 1970)

5. 3 理由疑問語と「のです (か)」の共起例

5. 2対し、理由疑問語と「のです (か)」の共起例は多い。5. 1の特例以外、理由疑問語は原則として「の」と共起する。そして丁寧表現であるなら、5. 2のように一部の「ますか」を取る例を除けば、「のです (か)」のかたちになる。

(38) 「〈略〉なぜ山本さんに言って、やめさせないんですか？」
(阿川弘之 『戦艦大和』 1965)

(39) 「そうとまで知っているのに、何故家においておくのですか」

(40) 「何故、こんな目に会わなければならないのでしょうか」

(41) 「何故もっと早く教えてくれなかったのですか」
(以上3例とも 渡辺淳一 『花埋み』 1970)

5. 4 他の疑問語と「ます (か)」の共起例

そして、他の疑問語であれば「ます (か)」の共起例を示すこともかなり容易にできる。

(42) 「近衛公をどう思いますか」 (以下2例を含め 阿川弘之 『戦艦大和』 1965)

(43) 「この家の人はタバコに無関心で見ちゃいられない。タバコどうしてありますか？」

(44) 「ところで閣下、今度の対米一件はどういうことになりますか？」

(45) 「何ということをするのです。本を読む農家の嫁がどこにいますか」

(46) 「それでは、母にはいつ話して下さいますか」

(47) 「何に一番難儀しましたか」

(48) 「それで、半年でどれくらい拓けましたか」
(以上3例とも 渡辺淳一 『花埋み』 1970)

6 まとめ

冒頭0. 2に示した稿者の違和感は、現代語の実情からも、また稿者が接してきた、ほぼ同年代以上の作家の手になる文学作品の用例からも、「理由あり」といえる。

ただし、1833年の『春色梅児誉美』にまでさかのぼるには不安で、明治前半の『和英語林集

成』でも確証はない、歴史的には「根の浅い」違和感ということになる。

とはいえ、疑問の終助詞「の」と丁寧表現「です」の優勢がつづけば、疑問語の有無を問わず、疑問文全体の丁寧表現として「～のですか」が多用されるものと考えている。

この「～のですか」は、口頭語の疑問形式「読むの？」に、「ですか」を添加する、簡便なテクニックだからである。

ことに、未定の要素が多い理由疑問文においては、未定の要素を「の」で焦点化できる利点もあって、原則的に「なぜ～のですか」が維持されるのではないかと考える。

益岡・田窪1992の、疑問語疑問文と「の」の共起についての指摘は適切だが、さらに「疑問語」を「理由疑問語」とそれ以外のものとに区分したほうがより、実態を説明しやすくなると思われる。

ちなみに、稿者が接した最新の疑問語疑問文は、以下の2例である。

- (49) 信仰に生きるべき宣教師、修道士がなぜかくも深く政治に関わりを持たなければならぬのか。
(2008. 10. 30 朝刊28面 小説 『徒然王子』 島田雅彦)
- (50) 経済危機をどう乗り切りますか？
(2008. 10. 30 朝日新聞朝刊31面)

7 付記

4. 2および6で示した、稿者の「違和感」の起点をたどる過程の、いわば「一里塚」として夏目漱石(1867～1915)の遺作『明暗』(1915)の用例の一部をしめす。全例調査の中途報告であり、「印象」というレベルでしかないが、稿者は漱石の、疑問語疑問文の用法に、違和感をもたない。用例・検索は1986教育社『作家用語索引 夏目漱石 明暗』による。

まず下記3例のように、理由疑問文には「の」が共起しやすいといえる(むろん終助詞「の」もある)。

- (51) 「じゃ何故行かないんだ」
(52) 「何故その背広と一所に外套も拵えなかったんだ」
(53) そんなら何故あの吉川夫人ともっと親しくなれるように仕向けて呉れなかったのか

また、下記3例のように、補足節のばあいは「の」を欠くことがある。

- (54) 「僕が何故今度この洋服を作ったか、その訳を君は知るまい」
(55) 「何故あたしが幸福だかあなた知ってて」
(56) 「此所を何故締めた」といって詰問する様な音が〈略〉

そして、下記3例のように、理由疑問文の丁寧表現は「の(ん)です」であって、「ます」ではない。

- (57) 「何故黙って帰るんです」
(58) 「私は何故もっと早くこの包んだものを兄さんの前に出さなかったのでしょうか」
(59) 「清子さんは何故貴方と結婚なさらなかったんです」

「ます」は下記4例のように、理由疑問文以外の疑問語疑問文であれば、使用される。

(60) 「何でも近いうちにまた入らっしゃるとかいう事でしたが、どうなりましたか」

(61) 「関君はどうしました」

(62) 「あたしが何時嫂さんに謝って貰いたいと云いました。そんな言掛りを捏造されては〈略〉」

(63) 「私がいつ勝手に認定しました。私のは認定じゃありませんよ。〈略〉」

これらは、本稿の基盤となっている益岡・田窪1992の記述と、それに対する稿者の補足事項に合致するものである。

そして最後に次の1例を示す。(64)は理由疑問文の述部で——補足節ではないにも拘わらず——「の」を欠いている。

(64) 「それと同じ眼がどうしてあの継子に満足できるだろう」

これは、理由疑問文のかたちを借りて明確な否定「いいえ、満足できない」を予測した、(19)(33)(34)に通じるテクニックであり、現代日本語そのものである。

全量調査をせずに判断すべきではないが、漱石の疑問語疑問文は、現段階では稿者には違和感をもたらしさない。すべてを今後の調査にゆずる。

【参考文献】

益岡隆志・田窪行則1992 『基礎日本語文法——改訂版——』 くろしお出版
『春色梅兎誉美』の本文は日本古典文学大系『春色梅兎誉美』（岩波書店）による。検索には、国文学研究資料館のデータベースの利用許可を得た。